

報告と記録

1. 連続講座「ベートーヴェン演奏を考える 2003」
2. 《第9交響曲》研究会
3. 図書館展示

報告者：藤本 一子

1. 連続講座「ベートーヴェン演奏を考える 2003」

第1回：レクチャーと演奏「ベートーヴェン演奏の現在」映像とレクチャーで探る

4月11日(金) 16:30～ 講堂小ホール

講師：礒山雅 / 土田英三郎 / 野平一郎

第2回：ピアノ作品の演奏研究入門「ベートーヴェンが楽譜を通じて語りかけてくる」

5月19日(月) 16:30～ 6-110 スタジオ

講師：今井顕

第3回：お話と演奏「弦楽四重奏の魅力」

6月20日(金) 16:30～ 講堂小ホール

講師：礒山雅

演奏：古典四重奏団

第4回：お話と演奏「ピアノ三重奏曲《大公》」

9月26日(金) 16:30～ 講堂小ホール

講師：土田英三郎

演奏：Pf.今井顕、Vn.小森谷巧、Vc.藤森亮一

第5回：分析と解釈「ベートーヴェンの緩徐楽章 初期ピアノ・ソナタを中心に」

11月25日(火) 16:30～ 6-110 スタジオ

講師：野平一郎

連続講座「ベートーヴェン演奏を考える」は、ベートーヴェン研究部門が活動の枢軸に位置づけているシリーズである。ベートーヴェン研究にとって、資料調査をはじめとする学的研究が重要であることはいうまでもないが、演奏の現在を問うこともまた、たえず求められている。演奏に反映されてこそ学的研究もその意味が獲得される。そのことを意識し、近年の研究をふまえながら演奏の問題を考察しようとする試みが、この連続講座である。

2003 年度は、野平一郎客員所員と今井顕所員の二人の演奏家を中心に、また外部演奏家の協力をえて 5 回の講座を実現することが出来た。その意味で充実した年度であったといえるだろう。世界的な規模で活動を展開している野平氏の参画は、当部門の講座活動に刺激を与えてきたが、本年度もいっそう、その感を強くした。なお 2003 年度は「室内楽」に眼差しを向けることを課題のひとつとし、2 回の講座にこのジャンルを組み入れた。

- ・第 1 回は「ベートーヴェン演奏の現在」。ピアノ・ソナタに焦点をしばり、現代に生きるベートーヴェン演奏のあり方を考察するシンポジウムと、野平氏の演奏からなる講座である。前半のシンポジウムは、礒山所長の司会に導かれて、野平一郎氏が作曲家・ピアニストとして発言を行い、今年度から研究所員に加わった土田英三郎氏が歴史的な演奏解釈の視点から意見を述べる形ですすめられた。古今のピアニスト 12 名の映像と音源を例に、過去と現在におけるベートーヴェンのピアノ演奏論が展開され、作品様式の捉え方から打鍵のタッチにいたるまで幅広く光があてられた。後半は野平氏によるピアノ・ソナタ第 8 番《悲愴》の演奏である。野平氏は 2003 年に“大阪いずみホール”において、さまざまな演奏家による「ベートーヴェンのピアノ・ソナタ連続演奏会」を企画構成し、自身で演奏も行い、さらに 2003 年末には新作《ベートーヴェンの記憶》を発表するなど、集中的にベートーヴェンに取り組んでいる。野平氏によるベートーヴェン演奏に対する鋭い洞察は、ベートーヴェンの音楽に対する新しい聴き方を開くものであろう。
- ・第 2 回「ベートーヴェンが楽譜を通じて語りかけてくる」は、前年度に引き続いての、今井顕所員によるピアノ作品の演奏研究入門講座である。いうまでもなく、音楽は演奏行為によって始めて実体化する。だが、作曲家がどのように書き記したか、その楽譜において何が意図されていたのかを読み取る作業が前提になくしてはならない。とはいえ、現実にはその方法が見出せない演奏者が多いのではないだろうか。大学生であればなおのことである。本講座では、さまざまな版（エディション）の比較、楽譜の本文テキストの解読に関する入門的な諸問題が、ウィーンでこの種の研鑽を積んだ今井氏によって、わかりやすく示された。実際の演奏を通しての解説は、学生にとって説得力があり、きわめて有益であったと思われる。とりあげられた作品はピアノ・ソナタ作品 13《悲愴》、作品 27 の 2《月光》、ほかである。
- ・第 3 回「弦楽四重奏の魅力」は、難解とも哲学的ともいわれるベートーヴェンの弦楽四重奏曲にアプローチする講座。すべての演奏会を、暗譜で演奏することで知られている「古典四重奏団」を迎えてのレクチャー・コンサートである。前半で取り上げられた作品は、弦楽四重奏曲第 15 番イ短調 作品 132。礒山雅所長による作品の解析と古典四重奏団による事例演奏を通して、後期ベートーヴェンのなかでは比較的親しまれているこの作品の構造が明らかにされ、魅力が伝えられた。後半は古典四重奏団の演奏による《ラズモフスキー第 2 番》。各メンバーが楽器の響きに深く

集中する演奏姿勢、そこから生まれる精緻なアンサンブルと純正なハーモニーが、強い印象を残した。なお、この日は、1999年にサザビーズのオークションに浮上して話題を呼んだ、新発見の《弦楽四重奏曲 口短調》が、2001年に刊行された楽譜を用いて演奏された。本邦初演の意義も加えられた講座であった。

- ・第4回は、今井顕（Pf）、小森谷巧（Vn）、藤森亮一（Vc）各氏による《大公トリオ》Op.97の演奏会。第3回にひきつづき、今年度のテーマである室内楽にアプローチする企画である。演奏に先立ち、土田英三郎所員によって、ベートーヴェンが室内楽に取り組んだ軌跡を概観するための、短いレクチャーが行われた。今回の演奏会に快く加わってくださったヴァイオリンの小森谷巧氏は読売交響楽団のコンサートマスター、チェロの藤森亮一氏はNHK交響楽団首席奏者として活動しておられ、また両氏とも国立音楽大学の講師をつとめておられる。ご多忙のなかを研究所の活動にご協力くださったことを、この場をお借りして感謝申し上げます。
- ・第5回「分析と解釈：ベートーヴェンの緩徐楽章 初期ピアノ・ソナタを中心に」は、ピアニスト・作曲家である野平一郎氏提案のテーマである。速いテンポのソナタ楽章の谷間にあって見過ごされがちな、“緩徐楽章”にスポットをあて、新しい側面からベートーヴェンの独創性を探ろうというもの。今回はとりわけベートーヴェンの新奇性が示されているとみられる若い時期のソナタ《作品7》《作品10》《作品13》がとりあげられた。これらの作品、特に作品10の3曲は、ベートーヴェンの初期作品のなかでも、比較的演奏が平易であるために、学習者用のソナタとみなされがちである。しかしじつは、従来の音楽システム（旋律、和声、拍節、ダイナミクス）を独自の手法で組みかえることを通して、きわめて斬新な音響空間が創出されている。そのイデオロムはピアニスト・ベートーヴェンの実践感覚なくしては生まれなかったものであり、付け加えれば、その解析は作曲家・ピアニスト野平一郎氏であればこそ可能なのであろう。

2.《第9交響曲》研究会

第1回：成立史が提示するもの-《第9》成立の前史から初演・出版まで 研究会導入をかねて

7月11日（金）16：30～ 6-112 教室

講師：土田英三郎

第2回：シラーの「歓びに寄す」を読む

9月12日（金）16：30～ 1-507 スタジオ（当初の9月5日から変更）

講師：檜山哲彦

第3回：現代における《第9》 演奏と楽譜の問題：ペーレンライター版が提起するもの

11月14日(金)16:30～ 1-507スタジオ(当初の12月5日から変更)

講師：藤本一子

多様な角度から個別に研究されることを通して、全体像が明らかになってくる特別な音楽作品というものがある。こうした作品の場合、ある側面に関する概要紹介だけでも1回の講座では扱いきれない質と量を抱えている。この点で「連続研究会」は有効な企画であろう。2002年度の《ミサ・ソレムニス》はその最初の取り組みであったが、2003年度と2004年度は、《交響曲第9番》をとりあげる。

《第9》は、作品テキストそのものの構造はいうまでもなく、前史、成立、文化・社会的な背景、初演以後の作品受容と作用の歴史、日本における受容など、作品周辺もまた例のない姿を形成している。今回の企画は、ながらく《第9》研究に携わってきた土田英三郎氏を座長に、6回の研究会と1回のシンポジウムを通してこの大作を考察していこうというものである。2003年度はその第1巡として、3回の研究会が行われた。

第1回の担当は、座長である土田英三郎氏。導入をかねて「作品成立史」を扱う。《第9》の最初の構想、第4楽章に声楽を導入するという着想、膨大な量のスケッチ、ベートーヴェン自身のほかの作品との連関など、作品成立に関連するあらゆる情報が、詳細な年譜のかたちで紹介された。氏のピアノによってスケッチを音として聴くことができたことはありがたい。音楽の萌芽が、しだいにひとつの構想へと育っていく過程が、つぶさに提示された。〔本研究年報 第133ページ以降に掲載〕

第2回は、東京芸術大学・音楽学部音楽文芸科からドイツ文学者檜山哲彦氏を迎えて、シラーの詩「歎びに寄す」に正面から取り組む企画である。ベートーヴェンは、シラーの詩から一部を抜粋して第4楽章に導入したが、じつはシラーの詩全体を「読む」ことは、意外にも行われていない。この詩を歴史的な文脈とともに紹介し、注釈を加え、ベートーヴェンが選んだ意味を考えようというのが今回の課題である。文学者の参加は当研究部門はじめての試みである。原詩の再読を通して、元の詩からいかにベートーヴェンが特定の節・行を抜き出して交響曲に編入させたか、かなりの程度までイメージが与えられた。なおこの詩にはベートーヴェン以外にも多くの人物によって曲がつけられている。当日は、その中から珍しい3曲が「コール雅(みやび)」(本学学生)によって演奏されるという楽しみも加えられた。これらの歌曲はディスクも出ていない。おそらくは本邦初演ではないだろう。〔本研究年報 第97ページ以降に掲載〕

第3回は演奏と楽譜に関する問題。担当は研究所所員藤本一子氏。作品の演奏解釈はまず楽譜の状

況を把握するところから出発する。《第9》交響曲の場合、成立事情と同じく、楽譜の状況もまた、きわめて複雑である。第3回研究会は、そうした資料情報を紹介することも目的のひとつではあるが、より率直な観点から、《第9》の場合の楽譜とは何か、なぜ楽譜の状況を知らなくてはならないか、そして何よりも、近年注目を集めている「ベーレンライター版」とは何か。このことを考えようというものである。“近々、ベーレンライター版を使って《第9》を指揮する予定である”という指揮者が複数参加され、終了後、ベーレンライター版に関する質問が多かったことは、この問題の切実さを物語っているようで興味深かった。OHP・録音・実演が多数交えられた。〔本研究年報 第157ページ以降に掲載〕

3. 図書館展示 6/7月 2003年

「おお友よ この調べではなく」 - 《第九交響曲》の歴史と現在

上記「第9研究会」と連動するかたちで、附属図書館において展示が行われた。内容を報告しておきたい。

企画・構成：ベートーヴェン研究部門 藤本一子（所員）

パンフレット編集責任：加藤拓未（研究員）

パンフレットは全25ページ。執筆は音楽研究所メンバーによる。

目次

作品成立から初演まで	加藤拓未
《第9交響曲》は性格交響曲（シンフォニア・カラクテリスティカ）か？	ジークハルト・ブランデンブルク/藤本一子 編訳
《第9》の決定版？	土田英三郎
《第9》日本初演いろいろ	福本康之
日本の《第9》出版—それは没後100年から始まった	長谷川由美子
昭和3（1928年）の《第9》——国立《第9》の始まり	長谷川由美子
《第9交響曲》合唱部分につけられたさまざまな日本語の歌詞	長谷川由美子 編
展示資料紹介	長谷川由美子/藤本一子

展示：貴重楽譜・当館所蔵の《第9交響曲》関連の貴重楽譜

《第9交響曲》自筆スコアのファクシミリ

《第9交響曲》初版譜スコア 1826年ショット社

《ミサ・ソレムニス》初版譜スコア 1826年ショット社
《第9交響曲》パリから出された版 1853年以降、パリのジロ社
《第9交響曲》チェルニーによるピアノ連弾用編曲初版 1829年ブローブスト社
《第9交響曲》リストによる2台のピアノのための編曲版 1853年ショット社
《第9交響曲》カルクブレンナーとエッサーによるピアノ編曲版 1838年頃ショット社
《第9交響曲》ヴァーグナーがバイロイト定礎式典で演奏した際の異同の書き込み入り
1869年リーターピーダーマン社
《第9交響曲》ブルカルトによるピアノ連弾、ヴァイオリン、チェロのための編曲版
1876年または77年 プライトコプフ&ヘルテル社

展示：図版パネル

《第9》初演の頃のベートーヴェン / 1823年ごろのベートーヴェン / ハイリゲンシュタットの《第9》作曲の家 / バーデンの中央広場 / バーデン近郊のヘレネンタール / バーデンの《第9》作曲の家 / ウィーンの《第9》作曲の家 / ウィーン初演のための請願書 / 初演のポスター / ケルトナートーア劇場 / アントン・ハイツィンガー / カロリーネ・ウンガー＝ザバティエーア / ヘンリエッテ・ゾントーク / フリードリヒ・フォン・シラー / 「歓喜によせて」 / ベートーヴェンのモットー / ベートーヴェンとシューベルト：シューベルトの《大八長調》 / ベートーヴェンとヴァーグナー / 『ベートーヴェン・フリーズ』 / 国立音楽大学による最初の《第9》演奏（昭和3年）

展示：楽譜・日本で出された《第9》の楽譜および関連書籍から抜粋

ベートーヴェン作曲 シルレル作歌 歓喜に寄する頌歌（昭和2年）
心の光（昭和7年）
歓喜（昭和8年）
地上の歓喜（昭和14年）
歓喜（昭和15年）
歓喜にあふれて（昭和19年）
よるこびの歌（昭和22年）
歓喜の歌 第九交響曲より（昭和33年）
歓喜の歌 日本語版（昭和62年）
薈庭楽話 徳川頼貞 著（昭和18年）
ベートーヴェンの「第九ジユムフォニー」 田村寛貞 訳著（大正13年）
讚美歌 140番（昭和6年）

以上